

会員の広場



「月田さんの思い出」

池ノ内 順一

昨年、近化の編集委員であられる田辺三菱製薬㈱の岡田光浩先生より、近化の会報誌への寄稿するようお願いを頂いた。筆者のごとき語るべきものを持たない若造が、歴史ある近化へ文章を寄せるなど畏れ多く、到底不釣合いだと思った。しかしながら、筆者は、かつて岡田先生に実験をご指導いただいたばかりか、神戸の街へ連日飲み連れて行っていただいた御恩があり、お断りできる雰囲気は微塵もなく、このように筆を執らせていただいている次第である。

筆者は現在、京都大学の工学部に所属している。日々、生物化学に関する基礎研究を行っている。十数年前、岡田先生に最初にお会いしたときは、筆者は小児科志望の医学生であった。学部生だった筆者を実験を習いに岡田先生の元へ派遣していただいたのは、学部生および大学院の間、ご指導いただいた故・月田承一郎教授である。月田承一郎教授は、二〇〇五年、京都大学大学院医学研究科教授の

在職中に五二歳の若さで脾臓癌で亡くなられた。当時、筆者は博士課程三年だった。本稿では、月田承一郎教授の思い出について書かせていただきたい。

月田承一郎教授は、研究室において、たとえ入学したての博士課程一年の学生であっても、自身を「月田さん」と呼ばせることを徹底していた。本稿でも以下では、月田さんと標記させていた。月田さんが研究室内で「先生」を排除し「さん」で呼ばせた意図は、サイエンスの議論をする際に、「先生」と「生徒」という関係は、忌憚の無い意見を出し合う上で障害になる、という配慮だった。実際、研究室のミーティングにおいて、スタツフや大学院生が鮮やかに月田さんを論破していた光景を何度か記憶しており、月田さんの思惑通り、研究室ではフラットな議論をする土壌が形成されていた。

月田さんは、東京大学医学部を卒業した後に、東京大学、東京都臨床研、生理研などを経て京都大学医学部医化学第二講座の教授になられた。研究分野は、上皮細胞の細胞接着構造全般についての細胞生物学で顕著な業績を挙げられ、亡くなられる前年、二〇〇四年には学士院賞を受賞しておられる。

月田さんとの最初の出会いは、筆者が学部生の講義のときだった。大学に入って意気

揚々としている学生を目の前に、月田さんは開口一番、「皆は凡人だからしつかり勉強しないといけない、凡人が少しでもオリシナリテイのある仕事をしようとするならば、これまでの先人の知識を十分に咀嚼しないといけない」と仰った。学部の間は勉強しなかったことを誇らしげに語る先生が多い中で、「大学でこそ必死に勉強しなさい」と主張する月田さんの言葉は筆者の心にひびかった。大学入学以前から研究に対する憧れのあった筆者は、三回生の終わり頃に、研究室の月田さんを訪ねた。その話し合いの成り行きで、月田研究室に出入りして実験をさせていただくことになった。

月田研究室に入って、当時講師をしておられた永淵昭良さん(現 奈良県立医大教授)に実験の手ほどきを受けた。しかし一年経って永淵さんが熊本大学教授として転出されたのをきっかけに、月田さんから、後は自由に研究しなさい、と言われた。

アレコレ無い頭を絞っては、論文を読んだり、細胞に試薬を振り掛けたりして、素人考えの怪しげなテーマを設定し、ちょっとは面白そうかなと思えるデータが出たときは、喜び勇んで教授室のドアをノックしたものだ。しかし毎回、月田さんからは「既にこういう観察が知られている」「データの解釈が甘い」「その研究は以前の研究の二番煎じに過ぎない」など、急所を突いた批判とともに

に、にべも無く教授室から追い返されるのが常だった。当時、こんな事を繰り返して、果たして仕事になるのかな、と何時も不安だった。

打率は相下に低かったけれども、筆者が博士二年になったころ、ようやく月田さんが乗り気になった結果が出た。それはトリセルリンと名付けた不思議なタンパク質【図1】である。学部生のときに岡田先生に教えていただいた実験をしつこく繰り返していたときに、偶然見つけることが出来た。このタンパク質は世界で初めて見つかった三つの細胞が接するところにだけ存在するタンパク質なので、三つの細胞(Tri-cell)に因んでトリセルリンと命名した。トリセルリンは、私達の体の中で、三つの細胞間の接着に必須のタンパク質で、その異常により遺伝性難聴などの病態が引き起こされることが、その後の研究で明らかになった。

二〇〇四年の暮れ、月田さんに教授室に呼ばれて、体調を崩していると伺った。そのとき病名ははっきりと仰らなかったけれど、医者の方の端くれとして、予後の悪い脾臓癌であることを察した。それから暫く、研究が全く手につかなかった。病を押して研究室に出てこられる月田さんを見ると涙が出て仕方が無かった。一カ月ほど自分が為すべきことを考えた結果、とにかく粛々と実験して、トリセル

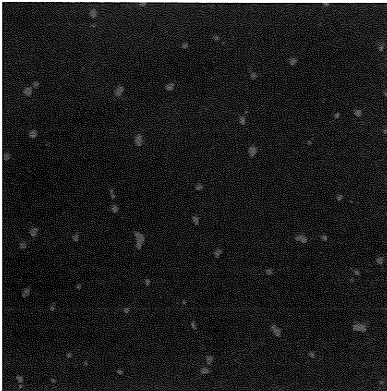
リンを論文として纏められるよう頑張ろうという気持ちになった。病気になるっても月田さんのデータの質に対する要求や、論文の議論に取り組む様子は、以前と全く変わらず、月田さんが病気であることを忘れる瞬間であった。月田さんもサイエンスのことを考えていると、病気のことが忘れられる、と仰っていた。病状は次第に悪化した、残された時間の中から多大な時間をトリセルリンの論文作

成のために割いていただき、二〇〇五年の二月、亡くなられる数日前に論文はアクセプトされた。

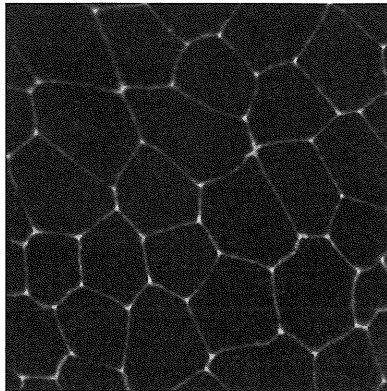
学部生のときから、データを持って行っただけで冷たく追い返されて、その都度憤慨したり、やる気をなくしたりしていたが、今になって思うと月田さんは何とかして「オリジナルティのある仕事とは何か、大きな仕事とは何か」ということを未熟な筆者に教えようとしておられたのだと思う。亡くなられる一ヶ月前、月田さんの状態が落ち着いていたときに、今の家内を連れて挨拶に伺った。翌年の春に結婚することを伝えて、結婚式に出てくださいとお願ひした。月田さんは、「自分はそのなには持たないだろう」と笑って、家内に「こいつは細かい仕事ばかり目がいってしまふ、時折、大きな仕事をしなさい、と僕の代わりに言っただけでください」と仰った。筆者の研究のことはサッパリわからない家内であるが、このことだけは愚直に守り、今でも時折、家を出る際に「大きな仕事をしなさい」と発破をかけられる。研究のことを一切知らない家内から言われると、なんだかとても理不尽な気分になるが、それでも月田さんのことを思い出して、月田さんが今やっている研究を見たら何とコメントするだろうかと背筋が伸びる思いがするのである。

(京都大学大学院工学研究科准教授)

トリセルリン



オクルーディン



【図1】白く光って見えるのが、タンパク質のあるところ。オクルーディンは二つの細胞間に存在するのに対して、トリセルリンは3つの細胞が接する点にのみ存在する。